

平成 29 年度第 1 回情報活用 IR 研究会

目的

日本国内において、研究成果の蓄積と公開の重要性が注目され、情報システムとしての学術リポジトリの必要性が認識され始めた 2000 年代、東京工業大学は独自に開発した学術リポジトリシステム Tokyo Tech Research Repository (T2R2) をリリースし、以来、継続的な運営と活用を行っています。

今日では、オープンサイエンス、オープンデータを促進し、強く連携すべきものとして学術リポジトリが注目されつつあります。特に、本学は T2R2 を活用し、研究活動のオープン化の取り組みとの連携をすすめており、学内外からの期待も高まっています。

本研究会では、オープンサイエンスについて取り組んでおられる山地一楨准教授（国立情報学研究所）に、来学いただき、オープンサイエンスと学術リポジトリとの発展的連携とその期待についてご講演いただきます。

概要

講演タイトル：オープンサイエンスと学術リポジトリとの発展的連携とその期待

講演者：山地一楨 准教授（国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系）

日時：平成 29 年 9 月 4 日（月） 10:30 ~ 12:00

場所：東京工業大学 附属図書館 会議室

対象：学内外の IR、学術リポジトリ、研究戦略業務関係者、本学の部局研究担当副学院長など

申込：<http://www.irds.titech.ac.jp/h29-1-workshop/>

講演アブストラクト

2005 年ころから普及が始まった日本の機関リポジトリは、紀要を電子化しオープンアクセスとして提供するサービスとして貢献してきた。日本で機関リポジトリが 780 近く運用されている背景としては、紀要リポジトリとしての側面が多分にある。一方で、雑誌価格の高騰に対して論文の著者最終稿をオープンアクセスで公開するという役割も期待されてきたが、コンテンツ総数としては全体の 15% 弱に留まっている。査読を経た論文でもって科学の発展を構造化しようとする分野の研究者にとっては、現在の機関リポジトリは、魅力的なメディアであるとは言い難い。しかしながら昨今のオープンサイエンスに関する情勢は、こうした状況を一変する可能性がある。

論文だけではなく研究データの公開や共有を目指すオープンサイエンスは、研究者による自発的な活動から始まり、今では研究資金配分機関のポリシーに影響を及ぼす時代となってきた。海外の主要な研究資金配分機関では、公的研究資金を受けた研究の成果を原則オープンアクセスすべきであるという義務化のポリシーを制定している。日本でも、本年度 4 月 1 日に科学技術振興機構が発表した「オープンサイエンス促進に向けた研究成果の取扱いに関する JST の基本方針」では、論文のオープンアクセス化を原則とすると同時に、その成果のエビデンスとなる研究データの公開を推奨することにも言及している。こうした研究資金配分機関におけるポリシーの変化は、研究者として取るべき責任の範囲や、それを実現するために必要となる機関としてのサポートの在り方に大きく影響する。

現在、国立情報学研究所では、オープンサイエンスを推進するための基盤の整備を進めている。その中核を担うのが、研究成果を公開するための機関リポジトリである。本講演では、オープンサイエンス時代の機関リポジトリは、どのような変容を遂げる必要があるのかについて、その機能的側面と運用的側面から議論する。また、機関リポジトリと連携しつつ、日々の研究活動の中で共同研究者間で研究成果を管理・共有するための新しい基盤についても概説する。